浪花
祿誌

街廼噂

春

208
4
93

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

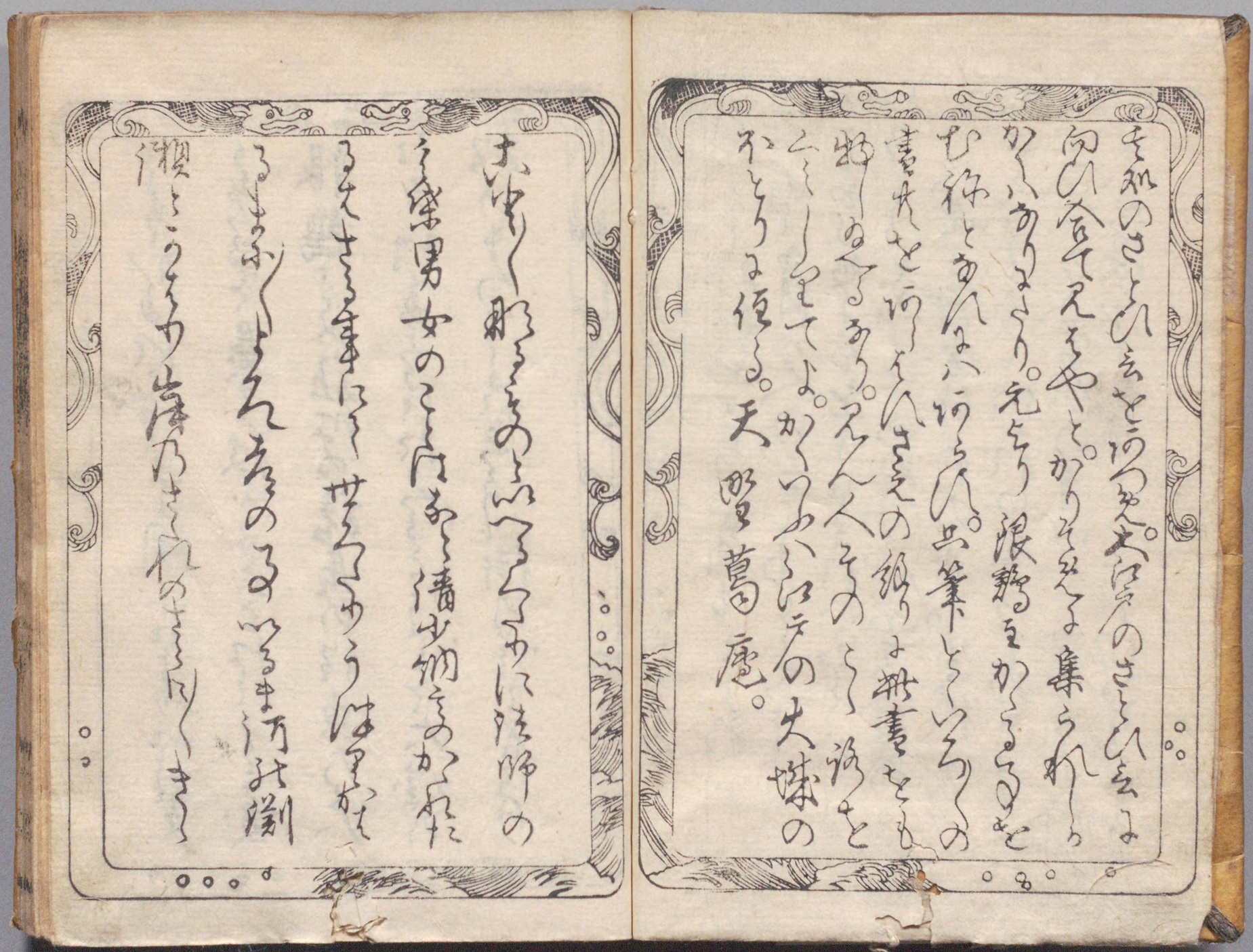
ガラス使用

国

こゝろ[illegible]れいやまろ[illegible]海もとゝ[illegible]利。
和とゝ[illegible]れ人の云ともとゝ。[illegible]
ゝとある如くそをとゝ[illegible]れハ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝてゝ[illegible]ぬ。とゝ[illegible]友人[illegible]
故[illegible]金[illegible]義の子[illegible]。生[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]仏れの書[illegible]
[illegible]て学ひの道[illegible]
と度浪死よ志[illegible]

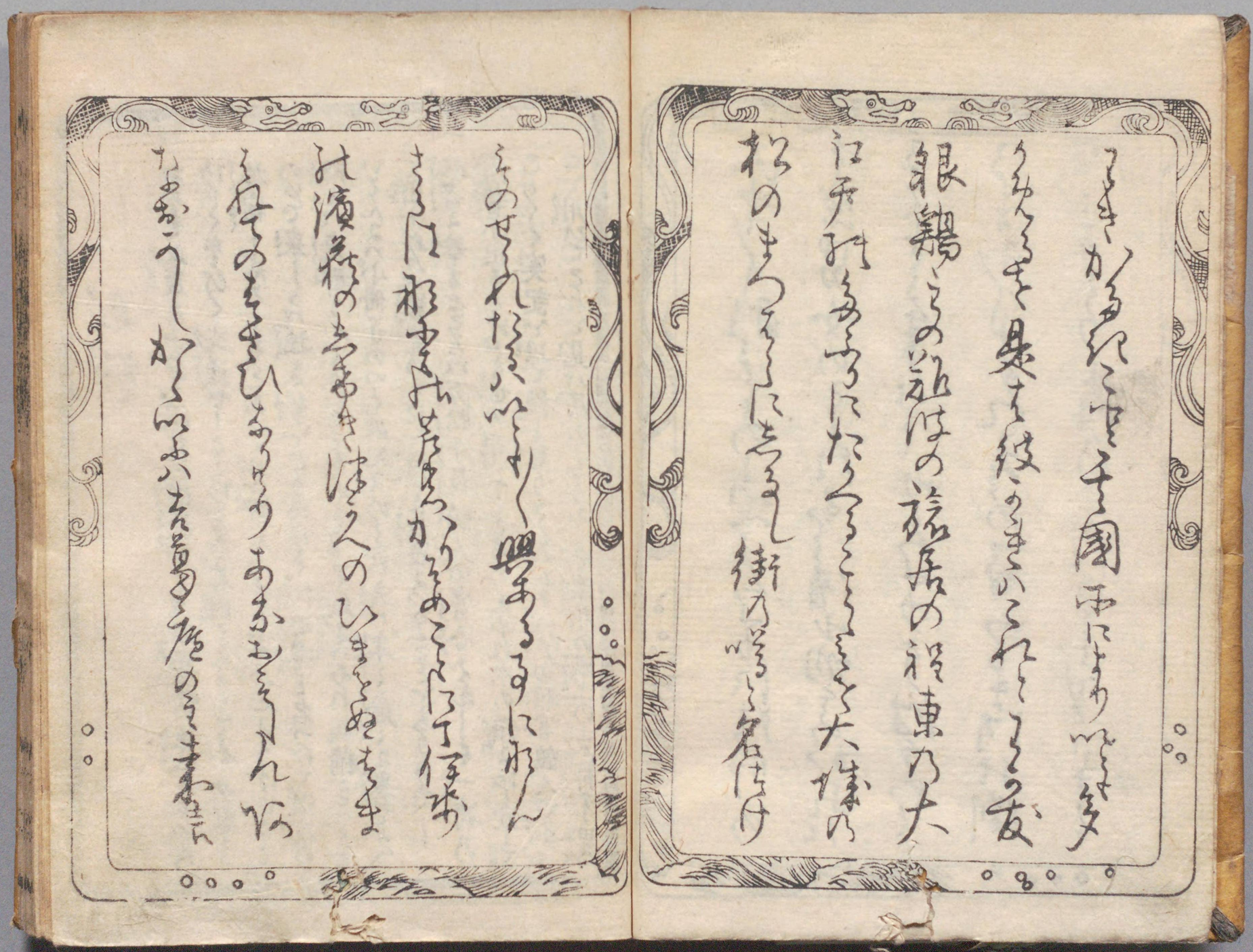
国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用



国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用



国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

凡例

一 おのゝ此度えどへ浪花へ遊歴せしゝ。松廼尾の主人とゝ由あり。ゝ半ばく文通せしことはゝ。其因ゝありて今此家に旅宿し。ゝゝとゝ見物するうち。不斗心ようゝこゝのゝで来しゝ。拙き筆をとりなげく。街廼噂と名づけて。浪花の風土は東都とかたりしゝをかきつゞるぬさにあれ其精ゝをもいたんゝいぶ冊子のつゝに処ゝ。夫い年ゝ歳ゝ巻をゝて出しゝれば。幾兒のゝに待て其密ゝをかゝるべし。

一 此書は挙るところは。万松千長鶴人の寄合なゝし。一時乃滑稽ゝ出るゝゝ。世ゝ弄ぶゝゝの志やれ本の類ゝ異ゝ。こゝぐく実記を以て種とせりされば江戸の雅客鶴人の苔心を用ひてこれを見ば居ながゝふゝ。浪花の風土の東都に異なることを知るに至らん。又大阪の諸君。千長万松の二客の間ひを起すとよく味ひく讀とれい。これまゝ聞ばして大江戸乃風土の浪花に異ふゝことを知るにいゝゝん。穴かしこ志やゝを本とかおりひ給ひぞ。

一 巻中三人の噺の言ゝ。左様で御座ます。どゝいゝし。ゝゝ。かゝいゝし。ゝゝ。ちゝどいゝることゝ志ゝ。ゝゝとゝいゝふゝゆゝゝ。志ゝゝく戯場の種本ゝ志ゝぶひ。御坐り候志ゝ。ゝりま正と志ゝし。ゝゝ。ぐゝ志ゝ。かゝゝ。といゝるゝも皆正の字を記しゝれぞ。此書を見ん人其ゝゝゝて讀ゝふべし。

一 ゝ升ゝりは正の文字。二巻目よりは假名を省てゝり升。ゝりま正。とゝ記しゝ。文字のゝゝ眼ゝふゝこと多くまゝゝとゝゝれべく。

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

浪花風流廼諸大人銀雞先生乃旅亭　乎訪布之圖

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

寄鶏祝誹諧歌

治まる御代よ住家いたひらけ明もく空もあらくの鶏　春風亭柳枝
夜晝の時もあくぬ鶏の聲くのりあさ御代めやてこへ　花遊亭春子
あさる餌と讓りて呼ハ君ら代の道はとゝへ庭つ鳥ゝも　鶴迺屋平佐丸
少なとゝ神樂太鼓は拍子よハとり驚くもめてるかりゝ　蕙迺屋梅好
庭鳥とかゝとゝへとおのつゝふさおりてゐる御代はよの巣　田字樓且見
朝ゝられ錦の羽袖うちゝられ君らくよの時やつくまゝふ　玉花樓駒子
いと長くさゝふる君らおつとあと朝夕はけるくこゝけの聲　奥手迺逃道
庭鳥のゆりえめてとゝくとあゝんとは人の舌打をすゝ　小夜迺屋靜丸

関は戸も戸さゝぬ御代いとりは音のそゝまとさゝ言ぬ君代　三度亭川太
ゝりの紋よ光とゆゝゝとは日は本のこと國い皆羽ゝ下ゝり　左右軒折丸
鶏のひゝふも都もとゝまりて君らめくゝまよかゝるゝ君ら　金中舍木綿丸
君ら代い角ひ一立はおいとりの玉子はとゝくゝ丸きよは中　廿露菓子丸
時つくゝとより外い鶏もとく家とゝとゝそゝ君ら代　賀之亭一丸
五日よい風十日よい雨ゝふいさゝとゝと告ゝるふいとりは聲　庚申堂猿丸
いまの戸もひゝきて春くたらゝ雄面白ゝひは初鶏はこゝ　政田親文
かんと苦ふゝふゝ人もなく雞の國家のゝ皆守る御代　二樂菴德丸
ゝつけて放一飼ゝ君ら代よ関も戸さゝくゝすゝ國民　養老菴壽丸
南京もあゝむも尾とゝれあゝふけふ春ゝ國はゝくゝ君ら代　獻ゝ亭酒丸

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

治まる御代のあめつちに聲あらく君ら齢をのべる鶏　龜遊亭統子
谷むせ一太鼓はうくの羽をのべひろげる時をうぐいす鶏　豐年樓津立
ゆるぎなく榮久しかるべしいみじくも時をつくる鶏　磯歌近江
長生の米は守とあらうねは宝とはたらく車尾はとり　源吾楼
戸さゝぬる世なひふ坂の関なれい鶏も空音をいそぐ　双松舎龍門
あらうねの鶏はなく音はひろうてあらうひなる時もとぢれ　中村梅玉
足のそ文字をもつて人は目も明とい鶏ら告る君ら代　東北菴鹿丸
称くゝどいうとうね御代ゝ鶏よつれて萬ふうあふ曙　牡丹軒初瀬丸
恵こゆる君ら齢い八百萬ふいく千世とうふよいうい　福壽亭海老子
時つくる関はうあーの家つとり今い戸さうね御代はこをるけ　蛙鳴園歌成

いうさうる鳴とうもうくて妹とせは中むはうはふ君ら代春　眞弓鶴斉
ゆるゆるふこりの國家はとうあり御代ゝ朝夕うくふ鶏　満ゝ亭潮丸
戰ひい昔とうりて雞はとゝこのこゝあのゝこゝくとめてうこ　凸坊凹丸
雞ふるく吾妻ふまりと銀とみうは這てる言のゝこゝまを　杏樹園眞種
君ら代い長るは鶏のゝあるはてもうくふいこゝとうるこ國家康寧　山田野亭
四方は関戸さうね時を夕つけはとりも名はのゝつふ君ら代　暁鐘成
治まる世い住吉とふつけのとりも尾をねようはそう橋　兎月軒満丸
君ら代の長鳴とゝ岩戸とい飛らゝ一後い民も戸さゝを　壺春菴梅子丸
諸人のいつゝ恵ゝは餌とうけて籠とゝふるくあらうねの雞　平亭銀雞
せは守もこゝろゆるーて眠るゝ人ゝ合さうね御代は庭鳥のゝゑ　玉廼屋熊夫

寄鶏祝歳句

鶏の声戸さゝぬ夜さく明やすし　楠里亭其樂
鶏よのゝとさゝろ初日影　蒼浪居魚淵
初鶏や家よこゝ後れ福くし　田鶴屋五梅
鶏のこゑ籠ろや雪乃家　呑舟舎水魚
初ゝりの伊勢ゝ神風ゝむ　交風舎米堂
ゝ咲いて鶏の五徳も思ふ日　丁ゝ亭百乙
餌よ富ゝ鶏や春榮の神路山　反古菴天来
砂せゝる雞の機嫌や梅乃中　松長舎天淵

街能噂巻之一

江戸前乃隠士　平亭銀鶏撰

發端

摂津國大坂ハ古より入津集會の地ゝして南よ海濱と受北り山城加中ハ寒暑程能来ゝ風俗至ゝ實義ある上國なゝ。されど人氣もいと地ごゝろゝして強ふとなく。諸國運送のいとゞゆを

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

風流の道に心を寄る人いと澤なる四方國々より
入り込の処の漫遊家も紀と半ば此地に遊ぶとなん。
思ひ足と留る者昔より今に至るまで其うず
擎くるかぞへがたし。実のごとなら[illegible]市中の美麗宮
作社あり。他國の及ぶ処にはあらず。實に是繁栄
他郷にはなくべる大都會の名地なりされば
摂の静謐あると字彙にも記し。又古語にも摂
然として天下安しとも見えたり。又或書に

難波の堀江を天下着船の津なれば。天下静謐の
儀と以摂津と名付しともいふ。又難波といふ
よしいと古代よりの起なり。神武天皇大和國に
天が下を治めさんとて。御歳四十五。甲寅の年
冬十月日向國高千穂の宮より皇師を起し。
吉備國高嶋の宮に四年居住し。更に進んで此
処に至りて名付ゆゑとて。又日本記と按に神武の
条に戊辛の春二月。丁酉の朔丁未の日皇師を東に

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

遂む。舳艫相接して方ゝ難波の碕よりしほ。潮の走ること大なるに逢ひぬ因て名附て此國を浪速の國とのゝしとぞ。然るを今横訛して難波とゝへり又浪華と書くとゝへ東北の隅なる入海なれば沖津風吹寄るときは淀河より落来る水と潮との合へるゝ。浪速く浪華の五処なれば かくうるとそ聞しが博識ぶりる説しゝ樂屋で一名をかりしのゝみゝく見物の耳ゝ遠く。唐土の

日本の古事来歴ゝの。もの〳〵の。氣いさふるゝ切落しの評判悪きものなれゝ成丈ゝ口を閉ていえゝと勝とゝ。さへあれ止ゝゝ得ざるゝ彼是の説を弊ゝ知らるゝぶりの誂を受るも我本意よへゝ〳〵ねど。今此地の風土を諸国へ知せんゝへ彼地ゝゝこれを何と唱へ此地ゝゝ是を何といふと。事細ゝ記ざれば婦女童子ゝ教喩しがゝ。されば此書ゝ又人人ゝ其心しゝてゝへゝ。それをれゝさて扨き愛ゝみ

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

出来る二人の遊客を。金の鯱と白眼んで。水道の水と産湯ふあびをがみつきの米と喰ひて日本橋真中ふく人とかりうる金箔附の江戸の子なり。さへあれ初めて浪花ふ来くりてへ。行先くらで分らべく。そこいまて問ひ。変まて聞。ちのげくのえてふい。度と失ひ。同じ処とるくくと。廻りて出る元の道。ヨヤ面やくぬと二人連。顔見合くく笑ひ出。万松時千長さん斯毎日くく出るくびふ。はでついちゃ。あん

ゆり知恵がねい。立前ふ魯助さんの数へさ心齊橋筋の先生へ尋ね。先方角の荒増と紙きくくを。出掛やうぢやねいか。千長扨かきふさくぐ私も。さう思ひて番中く。先刺も角の家で道頓堀くを。どふいきまくときくくら。私が顔とぢろぐ。えてなるこへ。きりきも変でお聞なくつさが。どふふくのでムウ。いそれく我ならくびくり。よくく氣と付てくくり。とまれば。ゆるほど地ふそよ。おーぐ見おがえのあ。

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

ゆくより二人で通ると処ばかんやり馬鹿くしん
ぢやあるめい。万松　イヤモウ叶ためく。何でも心齊橋
あづ祢てふを郊、いうぶと志や正。名いるんとうはこう
けち。千長　書附て拔き申しさ。六樹園の社中で狂名と
萬年舍鶴人といひやす。己ハ元江戸の人で鳥渡こう
ら赤と処が何う藝者ハ深く馴を支たりハ行く
然ハや七八年も居るさうぢ。万松　さういふをどが兎角
大坂へうと其ち足代留る人がいろもたり是何な

しても土地ハきれん人氣ハよう其上ハ金銀ぢるん
ぢんとハ國ぢう。暮ハるハいひえづさ。餘國のやうハ
向ハ鉢巻をして悪体をはく人ばかりさッたり見
うけぬい。千長　都ちハ土地の名。人氣もやさしく。
自ハくてんなどといふものもちくあると見えぬ。己
沛覽どうハ七ツの子供が皆ハ積奥褌をうけて
遊んぢ居ぬ。万松　ひんハねいこちらの小さん小僧
まだがふんどしぢ。ア向ハ居る子ハふんどしのかたりハ

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

腹掛の下垂が膝をかくしやうもなく言語つきのやさしい風うう。悪徒のやうにも見えす。實に感心ぞ。アヽ横町〳〵来る八百屋と見るせん屋。たゞよのと上る帯垂とうけて居やと。江戸小れんとぞ子。

千長 さやうさ昨日も見たべ廻の髪結と見えく鬢盥とを小さげ。綿襷をうけく。商人の見世くらひとと見やく。尻をえをよらべ四角な帯をみて至ッてお人がうる形でムリやく。

万松 ソレ千長さん車が来るあぶねいく。

千長 承知ぞ。オヤおつな車ぞ子。成程これハ思ひつきぞ江戸の代八車より人部が入らべ。そして荷を積まうが。長板ときて居るく薪るべ餘程積や正。

万松 さやうさアノ跡〳〵鐘木のやうなものを押のハ面白い。惜世車とベカ車といふとうひやくさッけ。

千長 ベカとハどふいふ訳ぞらう子。

万松 何ウ訳がいのりや正。それよりハ向ふを見なせんどふぞくよッぽど美しんきろうものちやアないか。

千長 成程綺麗ぞ

極彩色の古土佐と来く居る。立原さんを見せく
も是はほちがひるゝとふ極めぐらふ。万松 ちげひ
わん。琴臺さんが見せさくさぞ賛るぐらふ。千長 見
つけはいせんの髪の結ひやゝぐ可笑いやうぐがモて女へ
よいやど鮮るが幾人も見えやた。万松 きのふ見に
娘るどん実ふいひぶんなゝぐ子。そのやアさうと腹
がちっときく山時酒ぐ。何ゥやゆうゝや正。千長 向ふの
角ふ行燈が見えるが何ぐらふトいひるぐ二人しと見と
たやあて丈延りくり

見れば 清吸物 かゝる ご
ふくりん さゝみ 汁物 看
と言ゝるが看板なれば入 万松 吸物で
一ッ中ゝくんなせん者ハ何がなりやすぬへ 小女
ハイくそもようにつけてござりやすたものいくらかでき
ぬも。千長 るほどうきつけてなる。先さゝみ出
くんな。おやく解らぬこのがある。此菓子椀と
いふも菓子と椀、盛りさのうね。小女 へんなれをいへゝ
めさうる。万松 そゝて何ぐ子。小女 りん盛でゝり
ぬ。千長 椀盛こんく何ゥ言るこのとく。小女 まゝごくしく

ゆると奥より女房こんえ
く年ぶりの女くけいぐく
女房 イヤ〳〵こうしまんいり
ぢがこ。
きの茸。鯛の切身。なぶと入れまゝさはるものでゞ
ゞり升。お江戸ぐゆ大平種ぐゞり升。
万松 そしーこん
ゞ分ゆゝ。それとこちらぐゞ菓子椀といひゆを
ゞ。
女房 なぐらひてさゆゝぐゞゞり升。
千長 何でもねいてふ
おかきふ骨と折ゝ。さうなゝ其菓子椀で飯を
出しておられ。
小女 ハイ〳〵畏りやゝ。トいひなぐゝ女はあく
へゆくあとうく
千長 万松さん内ぐ分らぬをものがたる。世〻の字の

下へ○とういうこハこりやア何ぐらふ。
万松 されぐこ。
馬鹿〳〵く聞れも赤めんかんゆゝり知恵お
ねいゆゝぐ。
千長 旅の耻をうきぐすてぐ。きいて見ゆ正。
オイ姉さん。世〻の字の下こ○とういうこのこりやア
何ぐれ。
奥より女中いぐ。
女房 ハイ〳〵それハはるぐゞり升。
万松 ゆゝぬ内ゆこハ知りく居ろが。はさう四角とを
見ねんが。其内ゆが分らぬのぐ。
千長 て知れゆゝこ
姉さん。團子のことぐらふ。
女房 ハイく

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

ぬりさうな。こりやお江戸でいふすりがんのもどり
外。万松 又ゆりそくうみつ。なるほど土蜘蛛のもの
上方で九といふもの。きらてねさが画で○がかいて
ゆるうり分らぬ。そして上ふあるゞの字ハ何の
字ぐね。女房 ハイ〳〵ゞ○といふもでゆり外。千長
さて分らぬ。ゞ○といふ紙ぐね。女房 ハイ
すりがんハ宇治うり出すのが上品でゆり外ら
宇治○といきすのでゆり外。それと略して。只

ゞ九とだうりき外。やうと家ふよりまして。今
ひとゝ略しすて○と身もりき外廻もゆり外
ふゆて。万松 イヤゞ○の講釋おそれりゆて。それ
でも者ふ出すてんなせん。女房 ハイく といひなぐら
又ゆへゆく。千長 さてゆり女ちゆく博賢なものゞ。ゞ○の入
訳すゆてゆり分りゆて。万松 ゞ○の説ハ好問堂
の疑問會ふ出して見や正。千長 面白ふゆりや正。
あゆり博識家と。きてゆるゆり。思ひの外考ひが。

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

かくらも知をやせん。トそのうちふ菓子椀は飯とそえ出さと。ひさうぶいさ〻〻〇もぢ丸。さ〻

あもいぐーれんがふうう。こまとうそやどようのこ。

万松 ときふ飯と喰ッて出ちけや正勘定い何等ぐまぢ〻んと。といひろぐう二分金こまやーまとてく。

千長 愛ふ出さのがかりやい。

万松 迚もうぐさんけッこやァなぢんうう出ーゆ〻。姉さんこれで勘定ーて。ぢんあぢん。

小女 ハイ〻〻といひるぐ。二分金をえ〻ぢまく。

千長 めーとゝ冊菓子椀いく塩梅ぐ。ちうぐぐど江戸の大平種ぐ。イヤ昨日の鱧の骨切ハゆんやぐッ。江戸りそい物の味ぢとゆんやとふりめとぢなうる。

万松 鱧の白味噌仕立いなうう〻〻ようぢよ。それぐうう何でも。ちふ悪くいそぬてぐね此鯛のさーみも。ちうり〻〻居ゆそ。トそのうちふ勘定をして。うきつはは千長うきつはとぐ万松よ。

千長 何と安い物ぢやァねえり。

万松 ちりやァ馬鹿〻〻安い。よとや聞遠ひぢやァなめ。文と人のいふのゆそ。上方くいッ〻〻物が喰ふよ。いち〻〻直段と聞いてうぐいい。ぢやりてうとぢん。ぢめふりふるぐ〻いふい本の江戸での悪口ぐ。ふんてい

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

これで知れさもんど。千長 大きふさうさ。此大都 今ぞ。
そんなけちおてとまも毒にめしやあ爰で紙く萬年舎
処と聞く往や正。モシ姉さん。心斎橋筋とのふハ是ふ
往てくりね。千房 ハイくこれと八筋ほど南へおいでるとつい
心斎橋筋へ出ます。万松 コリヤア大氣ふお母様ありがとう
ゆく。往や正。千長茶屋と出る 万松 此筋くといふハと
方角で教られるふも誠によろしるぢやアないかね。
御説の通りさ江戸で方角といふのハ火事の時だろう

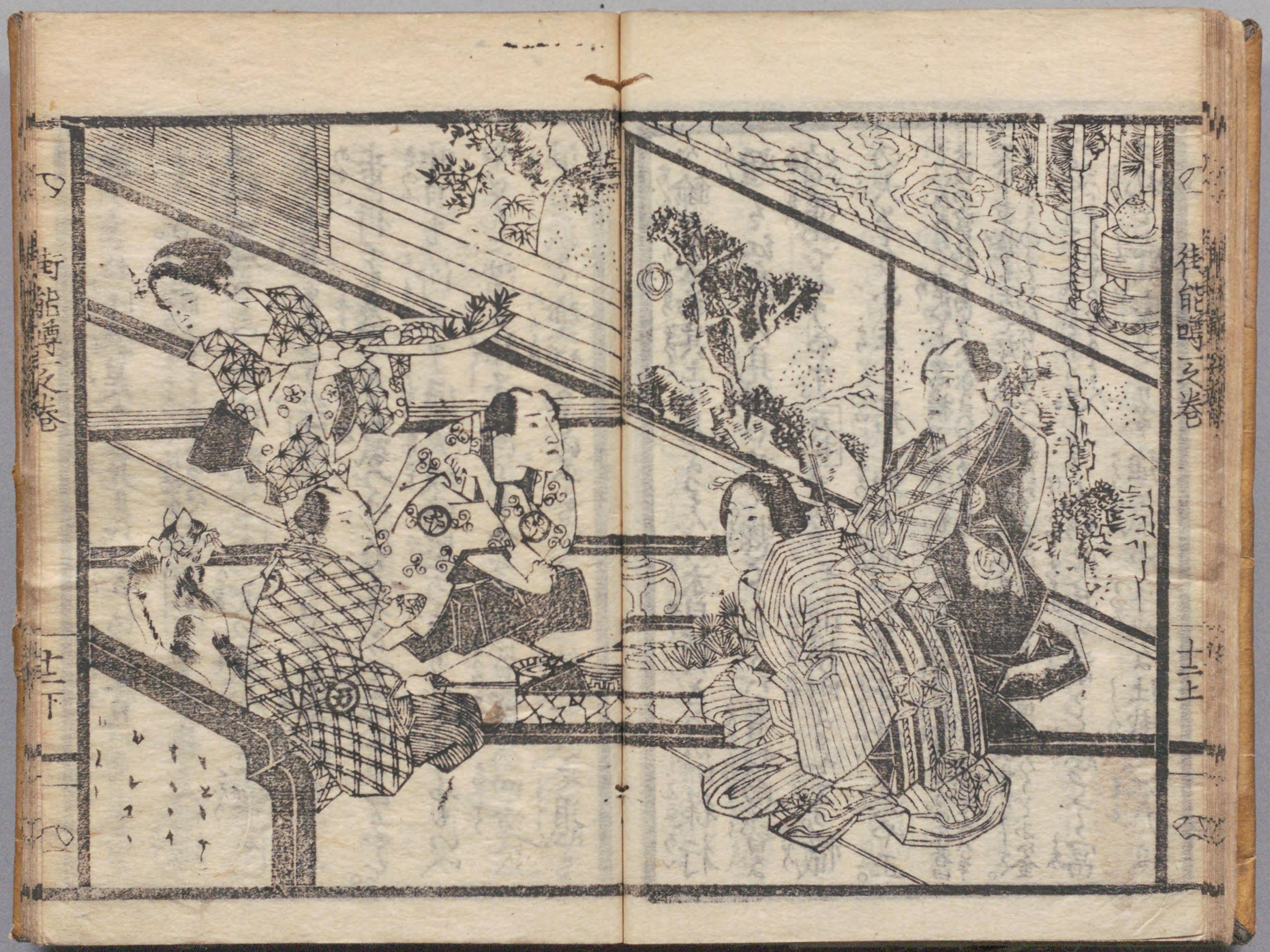
ぶね丈外を何でも右の方左の方で通用して居ると
うう。方角でいそれると実ほんごうきやアア筋くと
いふのを江戸でいふ一町二町といふ処と。こちらでハ一筋
二筋といふやうふ思それ中に。そして何町何町といふと
どこもくでいおかくハ何町何町と訓ぐいいやと。千長
サヤウサ江戸ぐ町と訓でいふ処ハ日本橋の室町麻布
の谷町丈外あもうぞへるかどぐねアレアア行燈を消
覧ドやー。これぐ一町くの名切と見えやが何方町

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

のゐも皆な横の方ゐ往来安全といふ字ゞ書くなり
ゆゑ。まやアモ厚い。おやうぐ子こんな善ことを。一すーさ
そでも諸國へ知らせく。真似をさせんそのごやモシ
向ゐの幟杭のゆうるそのゐ田波志のさゞゐて居るのい
アリヤア何ざらゐね。万松を知れゆーさびく魯助
さんゞそなゆーさいけ。アリヤアいレ普請場の記しさ。
千長ゐるほどく。思ひ出ーゆーさ。モシ愛の蕎麥屋
の行燈と御覽ドや。大好立流る物ざ八角の角く

が鍮石金物其上ゐ。およつこんの木目板いきつの世樣行
燈を江戸で見掛やせん。惣てこちらゐ看板向ゐ皆る
綺麗でムりやす。万松サヤウモ世横町ゐ見える。幟
の大さうゐ立く居る処を何ざらゐ一寸往てえや正。
といひるぐ。足とゆ横丁〻二丁よも入りてえれば富の札屋なり。○作者曰
大坂の宣札ど高ゐ家ゐひぐりめんびろうどがどうてこらゐ懸いど七八寸
又ハト本條もえてなく〻べて。見世さんゐうく。丈さゐいときくしびゆーさく。
ゐさりこのくさくひぐりゐんへ黒ばいくうどのたりをこう黒ばりうどゐ金
糸のうりとくゐどあくて。ハノア人形芝居ゐ。祭りと思うくく富
いこのこしなゆやうなりくく。
のれど賣家ざユリヤア強く氣ゐ立流る仕掛ゞ。江戸ゐ

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用



国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

無そうだね。千長 是ゝう見まび。江戸の札賣いざっとまさ
ものゞ。トいひながらよく札物ゆえて のぼりをとゝ。文字のたくえる 万松 こゝ千長さん出遠り
の綺麗なものを御覽じやし。犬の屎をどい藥屋し
くも見えやさん。千長 さやうさコレゞ提灯なしゝ
歩行でも蹈つりる氣づけひがるくて。安心でりやも。
昨日も御出や通大坂の家の造りるいどやもいへ
やさん二階は格子といふものゞなく。皆窓の四方松
油石灰ゞ塗切るといふものゞ。第一火之用心も

よく。先見附が立派でどゞもいへやさん。此処の家作い
かゞいやうゞ。そして左右の土蔵を御覽じやし。
残らず切石ゞ。きみあげてどゞ板とりふいたり。何と
綺麗ぢやア。有やすめゝ。万松 大きゝさやうさアし町
の入口の木戸の柱は。町の名ゞ書て打つけてありやす。
こちゝのかきつけい何ゞ。張紙無用ゝ。木戸の際の天水
桶も。かゝいゝ石で仕上のをび。格別目ゝつきやす。千長
江戸ゞ天水桶へ何町何町目 といてゝちつけておきやすゞ。

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

水戸の入口のちうも。早く眼まつして。能ムりやす。ヤモウ
麦等ガ心齋橋筋ぢやアたりやすめるる。万松さあるさ。
大分来ると申ぐ。聞く見や正。家ひとりのモシ心齋
橋筋ハ麦等でムりやすう。商人心齋橋筋ハ今おいで
ると方へ三筋戻て。南へおいでると。遂心齋橋筋おも。万松
南無三方まる来すぎる。千長我んなこりゃさらふと思
ふる。我つるやアさると微と急ぎや正。おかきゆ道草
と喰ひやしゝ。トりひるがゝたをいそぎ我ことこうでき。ゆゝくの
ことまして千年舎の家さあづれまさ。北松さまう

の解脱と出しくるる。折よくあるぐも在宿まてふるうふたひ。初面對の殺伐
もすみて。茶菓子ゑとのぐし。四方山のちるゆーる時とうつくるうちゆてゆく。
酒者の用意し。吸物膳を持て。女房いぢゝ。其あとより十七八の
下女ひろぶるさうなをのせて。出るかゝゝ千年舎。天全ひろひ。鶴人皆
さるるこハ私ガ妻ふムり弁。おつてろ安願ひ弁。万松千長
さゆうでムり弁るゝ。こハ初めて市目ふかゝまゝ。今日ハ
大ゝ氣ふおやうまゝうムり弁。ヨカラ又度く罷出ます
うゝ。何分市心安く願ひ弁。殊ゝいろくまゝ。沛馳走
と仰付られまして甚恐入弁。女房ようう皆さあ市出
なさうまゝさお初ふ市目ふかゝりまゝ。何も市法

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

さんざ一つ召なのうませ。鶴人 皆さ為さ酒いいうでゐる外。
うどふも江戸の市口あハなひます。きひざ。一つ初て上ま正。
万松 千長 先生ゑう小市馳走ふなりまてハ恐れいり。
外。いづれも少くづ用ひますれば別してなりかとふ
ゐる外。鶴人 ゝハ市たたゝがなひまするひ。私ハ飯ゐう
好ときてありますゐ。毎度妻ゑ小言をいをれ外。
女房ぢ恐そ 万松 ゝハ市樂ざゐる外。イヘ私なども鬼
角酒ゐ名。異見を聞ますとざ度ゐる外。千長 清

とりてなる
ゝ生す 鶴人 コレゝく指おられます。自由ふ。ゝくしまた。
式処さうづきのとりゆりあるくなれどゝとゐるゐ。
舎鶴人ゝくゝれ江戸両国のゐまれるて文字も頗ありて風流のあるゐと
ゝ和哥ハ濱臣の門人ゐて名ゐれゐくゝい六樹園の社中なり狂詩狂文と
善くゝ。かくゐゐ系事と好みゝ。南方流の奥伝と極む。書ハ松下堂と
学び。訓諧ハ江戸坐ふ名高ゝ。ゐれば江戸ゐて雷名の文人家とまゝ。
数ゝこの書画會。毎の名弘一年三百六十日。半分ハ風流ふ日とゐくゝしゐる
すき人なりゝ。費用のことふて。文政の末つくゝ。ゐて江地ふ登りふと
新町のゝゝゐるなりゝ。引ふひられぬゐくゝなりゝ。心なゝゝも足とゐめ。ハ
年の星霜と江地ふおゐゐ。ゐの道。又すてゝゝゐゐ。ゐゐゐ
ゐまゐ。ゐゐゐ万松千長の人となりと為めゐふ是も同ゝ風流家ゝ。
万松ハ五山堂の門ふ入りゝ詩と作ゐ。書ハ梧堂先生と学ひ行書とゐくゝ。
ゐくゝ狂哥と好ゝて。六樹園の門ゐ遊ゝ。千長ハ和哥と連歌と好ゝ。
唐画とゐくゝ。印刻ゐ好とゐて。其名四方ゐなりゐる風流人ゐれば。鶴人も
ゐなりゝが合ひゝち。ゐゐいでのむ酒の一盃ゝ又一盃ゐつゝれつゝ人の

ホ餘念ハなくりく

万松 イヤモウ大さういさきさいろく内聞
ナてがのりて内尋ナて其こといゟ埒明ず。おねなりの
面白さホ遂おや飲とゝ〜まし〜。千長 サヤウサ私も
大酩酊ぞ。鶴人 何迚内二人ながら〜一向ホおあうりな
さらん。主人八盃ぞ。私ぞくりのむやうぞ。イヤ酒と蚯
〜ぬい〜ぬうすいぞ。夏中のやうでい酒も飲
ません。江戸表も大さうホ引上さと承りまし〜さ
万松 春〜夏へかけまし〜てい胸ようくるやうでさもく

困りまし〜さイヤモシ先生毎日千長と二人御當所を
見物ホ出かけますがさて〜道の知れぬホへふこう
なぐら〜徳果ます 鶴人 イヤ御見最千万私などもこち
らへ参りさ時分い矢張御同前ぐらまし〜。併
此地の道い碁盤の目と盛りさやうでかりますから
筋〜さへ飲込ナすと。却て知れ安ふかります
千長 イヤモウ其筋〜ぬい誠ホよろりまし〜。ソレト
方角でぞ〜へられますホいふこわなぐら。おや関口で

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

ムリヤ。鶴人コリヤアこの国りなすりくさらふ。江戸へ右左ぐそ〜へ。こちらハ一すしくこをも西東と方角でいひますりこ。是もなれぬうちハいまごつきます。万松先生先生小能くお南ゆうして是りこい出こ積りでムリヤ。時ゑ街の綺麗なとと。家造の堅いこと小ハ感心ハこしやしこ。作者曰初面對のことなれば人ハ逃ハ言も紹介ハ心づきくまとど酒ゲ逃ハ通家のこくびもとろも眼前見る如し千長ぢれぢこ先生も此地小足とこ面なすりくさらふ。鶴人コハこの言恐きりぐ

住んで見ても中く結構なこ地ぢムリヤす。住人も江戸嚴早ムリヤとムリヤす。おふくりムリヤ。先百日も居ま、こらの覽下や。段く便利なとが知れて来やす。イヤおさうなが餘り荒こ。コレサ鮫でも取りふやらッぜい。横町の菓子桶も善らふ。女房ハイく今鱧の吸物ゲ出来る処ぐおます。万松千長イヤモウ沛着ゑりうすぎます必こ無用ふなさッてぐさりまし。鶴人何ス上るやうなものムリヤせんが當所でも

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

鱧と珍重いふ〜やす。今吸物が出来ろさうでゐりやす。

万松 イヘモウいろ〳〵ゆるでき沸〜さ。今も発生のおっちやいさ。其菓子椀ぬい今日大笑ひといふ〜ゆ〜さ。

千長 其はなーいた無用〳〵。ゆまり馬鹿くしい。

鶴人 イヤ初めて出なすゥてい。いろく分らぬとゞがいりやす。浪花の蘆い伊勢の濱荻所替れば品うとるとゥやすゞ品もかゝるゞ名のかゝるのゞ大分ゥりやす。ソレワコミムりやす冬瓜のもとゝろ

冬瓜といひやす。江戸でいふ南番瓜とかんさんと

ひ。菜の細ゝはびきとゥひ。生姜をはぢかゝ葱を

深柚實と只柚とゞゥりやす。鱧をめぐろとも

ゆのみとゥ。さんばをさゥら。黒鯛をちぬ。小はゞゝ。

ゝ。鯉をうろと。鰻をうとゞゥりゥひ。鰈を丸

ゝゝやす。万松 イヤ其すつかんでいおやきゥ苦労い

ゝゆゝ。千長 苦労も苦労雲泥万里のちゞひゥ

ちうおやちゞひの見立ゞ。もとゝなゝゆもなゝぬもで

ムリヤ。鶴人 ソリヤアとかゝふムリやゝさらふ。イヤまゞ江戸と當地とゞ名のちがふ物がなりやす。江戸ゞいふ篭のことゞ。いろきといひやす。万松 ヘイ引イヤなるも見ゆゝふ。アノぜんぶといふハりやア何でムリやす。

鶴人 アリヤア江戸ゞいふ赤かこ餅のことゞムリやす。江戸のけんけうどんとこちゝでのつぺい風鮨蕎麥と夜鳴といひやす。最是は惣ゝ夜の高人とさゝともいひやす。又煮賣酒屋を五分屋。三分屋と

いひ。まゝ傘の下ともいひやす。これハ野廣い傘の飴屋の傘のゆゝふ。すてきふ。おかきなんぞ問屋となく廣げゝ。其下へ皆なうすべりを敷さ、へ飲喰ひと仕やす番場の原などハ春ふも

と大壯賑やゝでムリやす。菓子拵ゆる。吸物も吸物をすひ。コレハイ、お塩梅ゞ。どふも先生いへやせ。ヒナ

又一盃頂戴ゞ。鶴人 マアゝ静と内ゆがりなさ

しゝとふハモウ遅くなりやしゝとう。料理人 内へ

さりやし。段〻浪花噺と滑稽や正。アハヽヽ。千長 ヽヽ
今夜ハ約束ハなりて恐れ入る。万松 ろくひが悪ク出たつて。ろ
くちとハ宿やてハ邪魔とするも。先生のさ
らふ。鶴人 おかきホ。ハヽこらでムりや正。何でも。後へ
宿さ宿さ。表より出入 のさるまや。長やん ぐんない。鯛ホ。うづい。
ぐわのるどふらや。鶴人 来ゆうが遅かりこと。うづいと
もて貰ふ。女房 酢味噌がようお成正。鶴人 お
するがつ。女房 さんや大根と一す取つておいでん。長 ん

家さん大根ハこうこのがおはす。千長 モシうづいとハハ
どんな魚でムりやす。鶴人 江戸でいふめぐる鰹のゆう
なりんでムりやす。万松 今さうな屋がいひゆさとうり。
らへ。鶴人 ホさん鰯のそとそうり。とハひ。大ぶりな
ごよ。といひやす。ハとハ覧じやし。江戸と遠さ
無屋ぐ。みんな籠へいれてハるさやす。千長 なる
ヤど半臺とりハあの方ぐ便利ぐムりや正。万松 千
長さんなるヤどこちらハ人ぐ上品ぐ。魚屋ぐ尾と

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

はちよッこうへゝ前垂と掛こおりやす。誠ゝ感心ざす

鶴人 當所ゝ大抵天秤崗ひとする者が。まへぐれとうけやす。ア、向と通るのゞ雪駄直しでムりやすゞ江戸とゝ大違ひゞ。アノ通りゝ後ゝ簞笥。前ゝ箱で笠なぐれかぶりゞ。天秤ゞかつぎやすゝ。知ゝ人ゞ見ると何ゞゝ分りやせん。地ゝて唯直しゝくとだりいひやすゝ。高人ゝと思ひやす。

万松 身形なぐも綺麗ゞ第一工面ゞゝと見えやす

鶴人 さゆうさ皆ゝのゝゝゝの形で。渡邉といふ処ゝ出やす。江戸の直しゝゝゝ大ちゞひの形さま。

千長 江戸ゝりハ格別お人ゞゝゞ江戸の直しのデイ目ゝくと歩くゝ何ゞゝ分らぬもでムりやす。

鶴人 イヤお刺身ゞ出来ましゝとゞ何ゝ加役ゞおはすゝ。

万松 其ゝ其ゝでよしゝ。

千長 手ゝ荒活や。大根と千ゝゝゝ。側ゝおくのとかやくといひやす。江戸でいふ附合のことさ。

千長 なるゞかやくハ

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

い。江戸ぢ料理人へ妻といひやす。万松上州邊で温飩蕎麥へ菜や大根と湯でつけて出すをとといひやす。是も矢張加役の訣ぢゃどんや拵だと親と見ゝ其側なのゝ子といふ訣でゝりや正。鶴人面白いおはなしぢ。初て聞やしゝ。こゝや此地の鰻と味ッく庶覽ドこう。江戸のやうな竹の串へ指をゝ。串へさして出すときゝ串とめき皿へいとりすゝ。大平へそうやす。千長ゝ日ゝ。ゝおつでゝりやすネ。三谷乃

重箱もそれうゝ思ひつゝさゆゝと見えやす。こちゝのい風味いとゝふでゝりやす。鶴人隨分善ゝゝりやす。網嶋の鮸与。せんばの取久なゝくきてゝ中ゝも喰やす。万松モシ此地ぢゝ鯉の濃漿や。鯨汁。鯨汁と白味噌ぢするといふとでゝりやすが違ひゝりやせんゝ。鶴人さゆうさ。皆な赤味噌物ぢゝ。喰つけると。白味噌もなゝく善うゝりやす。鯨も寛政の末。文化の初頃迄へ汁ゝ極さゆのでゝりやしゝぢゝ。今ぢゝ王子

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

さぢの油熬のといろ〳〵な製しゆうが出来さゆう
なりんで又仕方の秘伝でゆんやなてもゐりやす。千長
こりやア大ゑ氣ゆ古説の通りでゐりやす。ゑゆ鰍さぐ思ひ
ゆ〜ゆ〜さが。蛭子橋とゆ〜と通りゆすとき橋の上ぐ
はな〜亀。はな〜鰍と賣ゆ〜居ゆ〜さが。はな〜
鰻といふい江戸ゆゆりやすが。はな鰍といふい初めて
見ゆ〜さ。はな〜て亀の子と江戸のゆうゆ糸で釣さぐ。
行づりやうと切て其上へ載ておきゆ〜さがあれでい亀の

子ハ大仕合でゐりや。鶴人 なるかど此地でい鰻のかゐり
ゆ鰍とはな〜やス其くせ鰍乃直段ハ江戸と同ド
ゆりでゐりやス。万松 あのモこかちんと書てあるけれい
何でゐりやス。鶴人 あれハ雑煮でゐりやス。千長 蕎麥
屋の家ゆ書てけりやスヨ。鶴人 さゆうさ此地でハ蕎麥
屋ぐ料理と兼さり。茶漬と賣さり。ゆ〜さハ餅と賣
さりまやす。江戸のやうゆ蕎麥屋ハ板ばりり
とゆ見世ハのやり澤山ゐりやせん。ゆ〜さ此地乃

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

艘なぐきてハ。江戸の料理茶屋より。餘程おや
ゝて居る家がゝりやす。万松 さゝぐさうでゞりやス。
アノ船で料理をするぢやア。ゝりやさんゝ。鶏人 ゝりやア
船艘とんゝてまゝ別でゞやス。千長 ゝアさゝき見ゝ三艘の
舟をつゝだ幕と張ゝ。酒と呑ゞ居ゝ人がゝりやゝ
がゝりれが船艘ゝ子。鶏人 ゝゝゝゝそれでゞりやス。万松
モシおちゝの舟ハ縁ゝ掾がゝ。ゞがゝりゝ其所ゝ船人
ゞ歩きやス子。鶏人 ゝゝゝゝ大抵掾ゞ附て居ゝ屋根

舟などハ餘程念のゝゝゝ物でゞりやス。江戸の稽古舟
あゞゝこちゝゝゝハゝゝりやせん。千長 イヤ今日道で富の
札屋ゝ見ゝけやゝゝゝ。ゝゝゝ大壮觀ゝ立ゝ。立派な
ゝでゝりやス子。鶏人 ゝゝゝゝ私も初ゝ見ゝゝきまハ
魂ゝつぶゝゝゝゝイヤ札場よりもはゞ見物ハ富ゞ
當やスゝ其金ゝ富の本ゝゝ落札のゝる札屋ゝ。
馬ゝ附ゝ贈ゝ寄ゝやスゞ。其馬の飾の花美
なゝゝハゞんなでゝりやス正ゝ。ゝテ馬の先へ縮緬や。

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

天鵞絨で拵へた小幟と二本。左右へ持せて馬まへ
鈴とさげて其かざりつけハ美と盡して眼を驚ら
やス。万松すべて古ちゝハ何ごとも綺麗仕立でゝりやス。
正月の松飾などハどふでゝりやス定めて何ら綺麗を
でゝりや正。鶴人コレハ大同小異で格別かゝりやせんが。元
日の朝の雑煮ハ汁でゝやス。二日目と餅と焼て醤油
でいゝ〜やス。三日目の朝ハ菜と入まゝ。又味噌汁で
ゝやす。是と福若とゝいひやす。江戸でハ喰積のもど

かうらゝとゝいひやスが此文字ハ蓬莱と書やせん宝来
と書さゝでゝりやス。子供の上る凧も同じもどが凧と唱へ
やス。是も正月の末ゝ方でめて二月とおもふ上やス。ど
のやうな下賤のものでもおせちの膳へハ急度塩鯛と
附て。いそひやス。爰等ハモシ昔ゞ志のゞれて難有ぢやア
ゞりやせん。千長コレハ感心でゝりやス。イヤ雛と三月立て又
九月もかゞりとゝひやスが。さゝでゝりやすゝ子。鶴人九月ハ
唯一すとかゞるだけりさま。五月の菖蒲人形ハ綺麗な

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用

208
4
93

てもでゝりやス。六月ハ祇園処の祭禮で賑でゝりやス。 万松 賑
とはゝせがん。順慶町とゝの夜見世。ゐいとゝふ人が
出るぢやア。ゝりやせんか。 鶴人 さゆうゝき是い一寸見物なす。
てもいゝ。暮の浅草市といふもんでゝりやス。直指ことで
ゝりやスゝゝ。お供いゝゝゝや正。 万松 千長 いりヤアゝりゝぐふ
ゝりやス 鶴人 コレサ大さゝう煙ぜい。さんや竈の下と氣と
附ゐいゝ。

街能噂巻之一終

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93
ガラス使用

国立国会図書館　街能噂 4巻 208-93

ガラス使用